

日本語初級クラス活動『会食授業』—会話能力の向上を目指して

秋田英嗣

1. はじめに

ワライラック大学では日本語Ⅰから日本語Ⅳまでの初級日本語4科目を開講している。

日本語Ⅰ、Ⅱの履修生にニーズ調査でアンケートを取ったところ、日本語の授業では会話を学習したいと答えた学生が1番多かった。

そこで、2006年第3学期の日本語Ⅱでは会話がより上達できるように日本語授業の中に会食を加えた。これは、毎週、木曜日の昼食の1時間、私と会食しながら話すという活動で、教材、辞書、ノートなどは見ずに日本語のみで話すというルールを設けた。そして、その時の発言の積極性を成績評価することにした。会食で日本語のみで接して成績も評価することが日本語も会話能力向上になると考えたからである。

2. 会食授業までの経緯

2.1 ニーズ調査のアンケートの結果から

毎年毎学期にニーズ調査のアンケートを実施しており、2006年度第3学期には以下のクラスで実施した。その中で「日本語のクラスで1番学習したいこと」を聞いたところ、以下のような回答を得た。

| | |
|-------------|-------------|
| 対象：日本語Ⅰ履修学生 | 対象：日本語Ⅱ履修学生 |
| サンプル数： 28名 | サンプル数： 6名 |
| 回答：会話 24名 | 回答：会話 4名 |
| 読むこと 2名 | 書くこと 2名 |
| 書くこと 1名 | |

このように、どちらのクラスも約8割の学生が会話を1番に学習したいと答えている。

2.2 日本語授業の観察から

本学の日本語履修学生は授業中、書くこと読むことには熱心だが、会話は苦手だ。書くこと読むことを重視している。会話練習の時も、教科書、ノートなど書いてあるものを読みながら会話練習をしている。そうした習慣が日本語を学習する以前からついているように感じた。だから、質問応答のスピードが遅い。

そこで、質問応答のスピードを速くするために、会話練習中は、ノート、教科書は見ないで、できる限り立った状態で会話練習をするようにした。そうすることにより会話の応答スピードの

向上の改善を図った。会食授業は教室外で行い、ノート、教科書も使わないので会話練習には理想と考えた。

以上のような経緯から、2006年の第3学期の日本語Ⅱの授業で会食授業を試みた。

3. 会食授業要綱

3.1 科目：日本語Ⅱ

学期：2006年第3学期

総学生数：6名（工学部 4年生 2名、経営学部 4年生 1名、経営学部 4年生 1名、
経営学部 3年生 3名）

3.2 授業時間

毎週木曜日午前8:00—12:00（平常授業 午前8:00—11:00、会食 午前11:00—12:00）

3.3 成績評価方法

| | |
|--------|------|
| 会食中の会話 | 50% |
| 中間テスト | 20% |
| 期末テスト | 20% |
| 小テスト | 10% |
| <hr/> | |
| 合計 | 100% |

3.4 会食中の会話の評価方法

| | |
|-------------|------|
| 積極的な発言 | 40% |
| 連なる会話、発言 | 20% |
| 新しい語彙、文法の使用 | 20% |
| 総合的な発言内容 | 20% |
| <hr/> | |
| 合計 | 100% |

4. 会食授業

合計6回会食授業を実施した。会食授業の様子について下記に示す。

4.1 第1回会食授業

日時：2月1日（木）午前11時—11時45分

場所：大学内学生食堂

会食当日の平常の授業内容 動詞の過去形の導入

(1) 授業前の指示

会食の前に会食授業の要綱を説明した。日本語の教科書、ノート、辞書を見ることは禁止し、特に日本語のみで発言し、タイ語の発言は禁止することを強調した。

(2) 第1回目の授業の様子

学生同士の日本語での会話はほとんどなかった。タイ語会話が少しあるのみだった。禁止していた日本語の教科書やノートを見た学生がいた。

4.2 第2回目会食授業

日時：2月8日（木）午前11時—11時45分

場所：大学内学生食堂

(1) 第2回目の授業の前の検討

発言数をカウントしてみることにした。カウントした発言は大まかに3つに区分してみることにした。区別することによって発言の内容が確認できる。また、成績評価も具体的な数値が示せて容易になると考えた。さらに、学生に対して会食中の発言数がカウントされていてそれが成績の対象となっていることを示せば心理的な刺激を受けて積極的な発言を期待でき、そして、カウント数を知らせることによって目標ができてより多くの発言が期待できると考えた。

学生の発言は①、②、③と3つに区分した。そして、学生名を縦軸、発言区分は横軸にして表を作成した（表1）。発言区分内容を下記に示す。

①は自ら発言した総発言回数で、成績評価では積極的な発言に該当する。

②は自らが発言して会話が続いたもの。つまり、自ら発言して、相手が答えて、もう1度以上自ら発言したものである。成績評価では連なる発言に該当する。②に該当するものは全て①にもカウントする。

①、②に該当する例を以下に挙げる。

Ms.A：晩御飯を食べましたか。

Ms.B：はい、食べました。

Ms.A：何を食べましたか。

Ms.B：ソンタムを食べました。

上記の発言は Ms.A—Ms.B—Ms.A と会話が続いているので②にも該当する。

③は会食当日の授業で教えた語彙、文型を使った発言で、成績評価では新しい語彙に該当する。

③に該当するものは全て①にもカウントする。

例えば、当日の授業で「好き」という語彙を教えたすると下記の会話は③に該当して、自ら発言して、相手が答えて、もう1度自らが発言しているので②にも該当する。したがって、①、②、③全てにカウントする。

Ms.A：ソンタムが好きですか。

Ms.B：ええ、好きです。Aさんは。

Ms.A：私も好きです。

(2) 会食当日の平常の授業内容

存在文（～が～にあります。／います。）と所在文（～は～にあります/います。）

(3) 第2回目会食授業前の指導、指示

会食の前に各学生の発言回数をカウントすることとそれが成績評価の対象となることを伝えた。

①、②、③の発言別区分も例文を示して説明した。積極的に発言し、自らの発言を多くすると良い成績評価につながることを強調して指示した。

(4) 第2回会食授業中の発言数

表1 第2回会食授業中の発言数

| | ① | ② | ③ |
|-------|-----|----|----|
| Ms.A | 17回 | 4回 | 2回 |
| Ms.B | 12回 | 3回 | 1回 |
| Ms.C | 6回 | 1回 | 1回 |
| Ms.D | 6回 | 1回 | 1回 |
| Ms.E | 2回 | 0回 | 0回 |
| Ms.F | 0回 | 0回 | 0回 |
| Total | 43回 | 9回 | 5回 |

(5) 会食授業の様子、発見、確認

発言回数が成績対象となることを伝えてカウントすることによって第1回目の会食授業と比べて発言回数がかかなり伸びた感じがする（表1）。特に Ms.A と Ms.B が積極的に発言をしていた。Ms.C と Ms.D は少し戸惑いが感じられた。Ms.E, Ms.F は前回と変わりなくほとんど発言がなかった。進歩したことは前回と違って会食中にタイ語を話す学生がほとんどいなかったことだ。学生が会食授業の要綱と会食前の指示を理解したことが発言回数が伸びた要因である。

4.3 第3回目会食授業

日時：2月15日（木）午前11時—11時45分

場所：大学内学生食堂

(1) 第3回目の授業の前の検討

前回の会食授業で戸惑った学生やほとんど発言しなかった学生がいたので、そうした学生に積極的な発言を促すにはどうしたら良いのかを検討した。その中で2つのことを考えた。1つ目は学生に明確な目標とより強い心理的な刺激をあたえること。2つ目は会食前に発言の準備してもらうことであった。具体的には1つ目は学生に見える状態で会食中の発言をカウントすることによって成績の対象となるものが明確な状態で示せて積極的な発言が促せると考えた。2つ目は日本

語の平常授業が終わってから会食前に約 10～15 分の準備時間をあたえて、学習したことを整理して発言の準備をさせた。このことによって頭の中で学習した内容、記憶が整理されてより発言、会話を促すと考えた。

(2) 会食当日の平常の授業内容

形容詞を導入。初歩のイ形容詞（「おいしい」「あつい」「さむい」「きたない」など約 15 語）とナ形容詞（「きれい」「静か」「元気」など約 8 語）とあつい、さむいなどの反対語を教えた。

(3) 第 3 回目会食授業前の伝言、指導、指示

会食授業の前に約 10～15 分の準備時間をあてる。学習したことを復習して会食授業に備えるように指示した。また、カウント表を見せて各自の会食中の発言をこれでカウントすると伝えた（表 2）。

(4) 第 3 回会食授業中の発言数

表 2 第 3 回会食授業中の発言数

| | ① | ② | ③ |
|-------|------|------|------|
| Ms.A | 21 回 | 8 回 | 9 回 |
| Ms.B | 13 回 | 3 回 | 5 回 |
| Ms.C | 13 回 | 4 回 | 3 回 |
| Ms.D | 15 回 | 2 回 | 6 回 |
| Ms.E | 6 回 | 1 回 | 4 回 |
| Ms.F | 5 回 | 1 回 | 3 回 |
| Total | 73 回 | 19 回 | 30 回 |

(5) 会食授業の様子、発見、確認

積極的な発言が随所に見られ、発言が途切れずに会話が続いた。表 2 を見ると①、②、③のどの発言も倍近く伸びている。特に③の会食当日の授業で教えた語彙、文型を使った発言伸びが 6 倍である。これについては会食前の準備時間に学習した内容、記憶が整理されて発言を促したといえる。それと会食前の授業で導入したのは形容詞で、会話、発言を促進する役割があったと考えられる。その他にも、会食中には学生に明確に見える状態で会食中の発言をカウントしたので発言しようという目標が明確になって発言数が伸びた。

4.4 第 4 回目会食授業

日時：2 月 22 日（木）午前 11 時～11 時 45 分

場所：大学内学生食堂

(1) 第 4 回目の会食授業の前の検討

前回は授業の前に準備時間を与えることによって発言回数が倍以上伸びた（表 2）。そして、前回は学生各自で発言準備をした。しかし、1 人よりも複数の仲間で相談したほうが相互援助があってより効果があると考えた。

(2) 会食当日の平常の授業内容

味覚の語彙の導入（すっぱい、からい、あまい、にがいなど）、嗜好用語（好き、嫌いなど）、形容詞の過去形の導入。

(3) 会食授業前の伝言、指導、指示

学生各自で会食で発言したいことや習ったことを約 15 分間書く。そして、会食授業の前に数分間グループで相談して会食授業の準備をするように伝えた。今まであまり発言していない学生はよく発言した学生に、よく発言した学生はあまり発言していない学生に教えるように指示した。

(4) 第 4 回会食授業中の発言数

表 3 第 4 回会食授業中の発言数

| | ① | ② | ③ |
|-------|-------|------|------|
| Ms.A | 23 回 | 5 回 | 4 回 |
| Ms.B | 19 回 | 3 回 | 4 回 |
| Ms.C | 18 回 | 4 回 | 3 回 |
| Ms.D | 18 回 | 2 回 | 6 回 |
| Ms.E | 14 回 | 3 回 | 4 回 |
| Ms.F | 9 回 | 2 回 | 2 回 |
| Total | 101 回 | 19 回 | 23 回 |

(5) 会食授業の様子、発見、確認

①の総発言数は約 1.5 倍伸びている。1 人で考えるよりはグループでしたほうが学習した内容、記憶がより整理されて多くの発言を促したと考える。特に伸びているのは今まで発言回数が少なかった Ms.E と Ms.F である。これはグループでの相談によって学習した知識の相互援助、相互補完がされたと考えられる。

4.5 第 5 回目会食授業

日時：第 4 回目会食授業と同日の 2 月 22 日（木）午前 21 時—21 時 45 分

場所：大学郊外喫茶店

(1) 第 5 回目の会食授業前の検討

場所と時間を変更すると発言数にどのような変化をもたらすだろうかと考えた。今までは場所は学内学食で時間は午前 11 時からの 45 分間であったが、今回は時間を夜に変更し、場所は大学

郊外の喫茶店にした。

(2) 会食当日の平常の授業内容

第4回会食授業と同じ。味覚の語彙の導入(すっぱい、からい、あまい、にがいなど)、嗜好用語(好き、嫌いなど)、形容詞の過去形の導入。

(3) 会食授業前の伝言、指導、指示

特になし。

(4) 第5回会食授業中の発言数

表4 第5回会食授業中の発言数

| | ① | ② | ③ |
|-------|------|-----|-----|
| Ms.A | 25回 | 4回 | 6回 |
| Ms.B | 28回 | 7回 | 6回 |
| Ms.C | 26回 | 6回 | 4回 |
| Ms.D | 25回 | 5回 | 6回 |
| Ms.E | 11回 | 3回 | 2回 |
| Ms.F | 6回 | 2回 | 1回 |
| Total | 121回 | 27回 | 25回 |

(5) 会食授業の様子、発見、確認

夜、私服で雰囲気の良い喫茶店でお茶を飲みながらの授業であった。学生の会話を楽んでいる姿が見られた。気楽な気持ちになれたのだろう。発言数が伸びている。会話の内容も良かった。特に②の自らが発言して会話が続いたものが多かった。

場所と時間を変更することで発言数や会話内容などが増減することが発見できた。

場所、時間の変更以外の理由でMs.B、Ms.C、Ms.Dの3名の①、②の発言数が伸びた要因を考えてみた。考えられることは復習、反省、準備などをしてきたかもしれないことだ。会食前の授業(午前8時~11時)のあとに第4回会食授業(午前11時~11時45分)があり、それから約9時間後に今回の会食授業を行った。この間に午前中にあった会食授業の復習、反省や夜にある会食授業の準備を自主的にしていたと考えられる。

4.6. 第6回目会食授業

日時：3月1日(木) 午前11時—11時45分

場所：大学内学生食堂

(1) 第6回目の会食授業前の検討

計5回の会食授業でどれぐらいの成果があったのか、学生がどんな収穫があってどんな会話発

言能力をつけたのか自然な状態で観察したいと考えた。そこで試みたことは会食発言カウント表（表1—4）をつけるのをやめることにしたことだ。それから、会食前の発言準備時間もあたえな
いで実施することにした。

(2) 会食当日の平常の授業内容

動詞て形の導入…（例）窓を開けてください。窓を閉めてください。

(3) 会食授業の様子、発見、確認

第4回目、第5回目に比べて発言がかなり減った感じがする。どきどき発言の全くない空白の
時間があった。今まで発言回数が多かった Ms.A、Ms.B、Ms.C、Ms.D の発言数は少し減った程度
であるが、発言回数が少なかった Ms.E、Ms.F の発言がほとんどなかった。会食前の発言準備時
間はあたえるべきだった。

5. 会食授業での発見、確認

会食前、会食中の教師の行動、指示、環境設定指示が発言数の増減に関係することが確認でき
た。具体的には、1 つ目は会食中の発言回数のカウントをして成績評価の対象を明確に示すこと
で学生に心理的な刺激と目標を与えて会話を促す。2 つ目は会食前に準備時間を与えて話そうと
する内容を整理して他のメンバーと相談して学習情報の相互補完、相互援助をさせる。3 つ目は
会食の時間、場所を変更する。この3つの総合的な効果によって発言回数が増えた。

5.1 会食中の発言数の成績評価とカウントの関係

日本語会話能力の向上という目的で会食授業を始めた。会話の発言数で成績を評価するのは積
極的な気持ちで会話をしようとする気持ちこそ会話能力の向上になると仮定したからである。会
食での成績の 50%の比重にすると学生に説明したが、最初の会食ではほとんど発言がなかった。
そこで、会食前に発言回数をカウントすることを伝えて、成績に占める発言回数の比重が大き
くなることを伝えると発言回数が伸びた（表1）。そして、次回ではカウントしている姿をはっきり
と見せることによって発言回数は大幅に伸びた（表2）。発言回数をカウントしているところを見
て発言しようとする心理的な刺激と目標が明確にできたのだろう。

5.2 会食前の発言準備時間

第3回会食授業で会食前に10～15分の発言の準備時間をあたえた。学生にはこの時間に多く発
言するにはどんな文、語彙を使用すべきなのか復習、検討するように伝えた。その結果、発言回
数が大幅に伸びた（表2）。学習した内容、記憶が整理されて発言を促したのだろう。第4回会食
授業の前には会食前に10～15分間、発言したい内容を書かせた。書かせたあとクラス6人全員で
発言内容を数分間話しあわせた。発言数の比較的少ない学生が多い学生に相談する姿が見られた。
そのあとの会食は大幅に発言数が増えた（表3）。今まで発言がほとんどなかった学生も積極的に
発言した。準備期間があることによって発言しようとする内容、記憶が確認整理される。それを

書くことによって内容がより正確に確認整理される。そして、相談することによって情報交換ができ、より語彙、文が増え、相互援助、相互確認整理ができる。このような要因で発言数が増えた。

5.3 環境、時間の変化

第4回目(表3)と第5回目(表4)の会食を比べると、5回目の会食の発言数が大きく伸びた。5回目の会食はいつもの食堂ではなくて郊外の喫茶店でした。時間は夜9時から私服でした。郊外で学内生活から開放された感じでリラックスして会話を楽しんでいた。会話の内容も良かったと感じた。環境、時間を変更したことによって会話が促進された。景色、雰囲気、清潔感、温度、明暗などが発言内容に影響を与えることが考えられる。また、時間では、朝、昼、夕、夜などの影響も考えられる。そして、生体的には空腹時、満腹時なども関係するだろう。その他に会話の相手の服装、男女の相違、年齢、知識、社会的地位などが影響を与えるだろう。

6. 会食授業後の学生の収穫と変化

会食授業をしたことによって学生に良い効果をもたらした。例えば、普段の授業中でも積極的な態度で集中力が増して質問などを多くするようになった。また、質問応答中に教科書、ノートを見る癖がなくなって質問応答の速度が速くなった。それから、第4回目の会食授業でグループでの授業の発言、会話準備したことや教室外でしたことなどによって学生間に新しい友情が生まれた。

7. 会食授業での教師の収穫

今回の会食授業を通して教師にも多くの収穫があった。まず、会食中に学生の発言、会話を聞く中で学生の日本語授業の理解度、誤用が簡単に確認できる。その中で理解していないところや誤用があれば次の授業で修正できる。また、毎週会食をする中で教室内では築けない学生との信頼関係も生まれた。

8. 授業への応用

成績評価の対象を明確に示して心理的な刺激を与えると発言数が伸びた(表1、表2)。発言数と心理的な刺激が結びついている。そこで、教室内の会話練習では何らかの目標となる心理的な刺激を与えて練習すれば効率が良いかもしれない。

また、会食授業前に準備時間をあたえることによって学習した内容、話したい内容、記憶が整理されて発言数の向上につながった(表2)。そして、それを学生同士で相談することによってより発言数が伸びた(表3)。教室内授業の会話練習やタスク、ゲームの時にも学生に準備時間をあ

たえてグループで相談させてから行くと効果的である。具体的な例では、会話タスクの前に最初に学生個人で考えて整理確認して発話する内容の書き、そのあとグループ内で相談してから実行させる。そうすると内容、記憶が整理確認されて相互援助、相互情報保管ができてより円滑に実行される。

それから、第5回会食授業では大学郊外の喫茶店で夜に実施した会食授業で総発言が伸びた(表4)。このことは場所、環境、時間、明暗が発言数や会話内容に影響をあたえると言える。授業で授業計画を立てる段階から場所、設備、時間などを慎重に選ぶべきだろう。

9. 会食授業と会話能力の向上

会食授業は学生の会話能力を向上させることができる。第2回会食授業(表1)と第5回会食授業発言数(表4)を比べると①の総発言数と②の会話が続いたのが約3倍伸びていることなどや第5回目の会食授業の所見であるが学生が質を向上させた会話を楽しんでいる様子などから向上につながったと考える。

10. おわりに

会食授業をしてから学生の積極的な授業態度、授業中の集中力が向上し、会話での迅速な質問応答ができるようになった。また、教師自身は学生との信頼関係の向上、授業の理解力の確認などができるようになった。教師と学生、双方にプラスの要素が確認された。今後は、1学期間だけではなくて長期的に取り入れていきたい。学生数や時間などに制約はあるが、全ての日本語科目にも会食授業や同様の課外活動も取り入れる。

参考文献

岡崎敏雄、岡崎眸(1997)『日本語教育実習—理論と実践—』アルク

横溝紳一郎(2000)『日本語教師のためのアクション・リサーチ』日本教育語学会